

一 先を正しく見通す 藤堂高虎の眼力

藤堂高虎は、秀吉の弟秀長、秀長死後その養子秀保、ついで、秀保死後は秀吉に仕え、文禄4年（1595）には伊予宇和島7万石の大名になっており、豊臣恩顧の大名の一人である。

ところが、その高虎は、かなり早い段階から、「つぎの政権担当者は家康だ」という見通しをもち、家康に接近している。家康が秀吉に膝を屈し、京都に屋敷を築くことになったとき、高虎が家康の京都屋敷築造を援助し、それを機に接近していったといわれている。天正15年（1587）のことという。天正15年といえば、まさに秀吉の上り調子の時で、家康はまだ豊臣政権の一大名にしかすぎない。高虎は他人がまねのできないものすごい先見力をもっていたのであろう。

文禄の役がはじまり、高虎は水軍を率いて朝鮮に渡ったが、朝鮮出兵中、高虎は家康と頻りに手紙のやりとりを行っていた。無謀な朝鮮出兵と、文禄4年（1595）7月におきた秀次事件で、高虎は完全に秀吉を見限ったものと思われる。

この秀次事件は、秀吉に2人目の男の子秀頼が生まれ、養子に迎え、関白職まで譲った秀次に謀反の疑いありとして死に追いこんだもので、この時、秀次の正室・側室とそこから生まれた幼い子まで含め、39人が、京都の三条河原に引き出され、そこで虐殺といってよい殺され方をしたものである。

秀吉が、何としても豊臣家を秀頼につがせたいとの執念で、秀次とその系累を抹殺しようとした事件であることは誰の目にも明らかで、この事件から、豊臣恩顧の大名たちの秀吉離れ現象がみられる。高虎もその一人で

あった。

ただ、その場合でも、誰もが「つぎの政権担当者は家康だ」とみていたわけではない。毛利輝元という線も考えられたのである。しかし、高虎は、秀吉を見離すと同時に、家康待望の思いをさらに強くしていた。

注目されるのは、慶長4年（1599）、高虎が弟正高を江戸に人質として出している点である。ふつう、大名が江戸に人質を出した第1号を、前田利長が母芳春院（前田利家の妻まつ）を差し出した時としている。

これは、前年、浅野長政・大野治長・土方雄久が家康暗殺未遂事件をおこした時、利長も疑われ、その嫌疑を晴らすため、母を人質として出したもので、これが最初とされてきた。芳春院が伏見をたって江戸に向かったのが慶長5年（1600）5月17日のことである。

したがって、高虎が弟正高を人質として送った方が時期的には早く、これが、大名からの徳川家への人質提出第1号ということになるのではなかろうか。

では、まだ、関ヶ原の戦いがおこるかどうかもわからない段階で、なぜ高虎は人質を出したのだろうか。おそらく、高虎は家康と三成とが戦いをはじめるであろうことを見通し、早くから、「自分は家康様のために働く覚悟です」とアピールするためだったのであろう。

こうした高虎の行動をもって、やれ「風見鶏」だとか、「腰が軽い」などと悪くいう傾向があるが、これは、江戸時代の儒教的武士道徳が定着してからの評価で、戦国時代は、強い者に付くことは当然の選択だったのである。

教訓

- 現在の状況だけで判断するのではなく、将来的な見通しをはっきりと判断する洞察力が必要である。
- 自分の信じる方向へ、人より先んじて行動を起こすべきである。

人質
藤堂正高

前田利長が母芳春院

浅野長政・大野治長・土方雄久が家康暗殺未遂事件



藤堂高虎

一
一

新しい価値を生み出す 加藤清正の力

賤ヶ岳七本槍

文禄・慶長の役

清正の虎退治

肥後半国

北肥後、小西行長に南肥後

菊池氏、隈部氏、阿蘇氏

国人領主

清正堤

清正公様

秀吉家臣の中で、加藤清正というと、どうしても、賤ヶ岳七本槍の一人としての活躍ぶりや、文禄・慶長の役のときの「清正の虎退治」の話などが念頭に浮かび、戦いで豊臣政権に貢献したという印象がある。

もちろん、合戦を得意とし、秀吉家臣団の中の武功派を代表する一人であることはまちがいないが、実はそれだけではなかった。「意外にも」などという清正に失礼になるが、内政にも堪能だったのである。

清正は、天正15年（1587）、佐々成政の改易のあとを受け、肥後半国25万石を与えられ、熊本城主となった。このとき、清正に北肥後、小西行長に南肥後が与えられている。

国入りをした清正が目にしたのは、荒れ果てた土地だった。というのは、肥後国には、それまで一国を支配するほどの戦国大名がおらず、菊池氏、隈部氏、阿蘇氏といった国人領主が群雄割拠する状態で、菊池川・緑川・白川といった河川を制御することができず、たびたび洪水に見舞われていたからである。

ふつうの武将は、「一国一城の主」ともなれば、まず、自分の居城を築くことから始める。ところが、この時、清正は、居城造りを二の次にし、まず、河川の堤防造りに着手しているのである。これが、現在でも熊本県各地に残る清正堤で、中には、いまも立派に堤防の役目を果たしているところもある。清正のことを「土木の神様」などというのもそこからきているし、熊本県人は、清正のことを清正などとよびすてにしない。「せいしょこさま」といっている。漢字にすると「清正公様」で、清正公だけでも尊称なのに、それにさらに様をつけてよん

でいるくらいである。

肥後は、阿蘇山の火山灰などが積もり、それが川に流れこみ、川底をあげる形となり、そのため洪水がよくおこるわけであるが、清正は川底に火山灰が積もらない「鼻ぐり井手」といった工夫もしていた。これらは、土木技術にすぐれた森本儀太夫・飯田覚兵衛の二人が中心になって取りくんだ成果であった。

その後、清正は、慶長5年（1600）の関ヶ原の時は東軍徳川家康方についた。清正軍は関ヶ原には出陣しなかったが、九州における東軍として、薩摩の島津軍に対する押さへの働きが評価され、戦後、西軍となって改易された小西行長の領分を与えられ、肥後一国52万石の大身となっている。

肥後一国の大名となった清正がつぎに着手したのが川尻港の整備であった。これは、まさに清正のイノベーション力であり、清正が前向きに、新しい価値を生み出していこうと考えていたことを物語っている。

のち、いわゆる「鎖国」によって海外貿易が禁止されていくが、清正の時代は、家康の朱印船貿易奨励もあって、有力な九州大名は自ら船を仕立て、東南アジアとの貿易を行っていたのである。

清正は、領内の農民たちからの年貢収入だけではなく、朱印船貿易による外貨稼ぎにも乗り出していったことがうかがわれる。

森本儀太夫・飯田覚兵衛

小西行長

川尻港

鎖国

教訓

- 外にばかり目を向けるのではなく、内にある問題をしっかりと解決する必要がある。
- しっかりと地盤を固めてから、外へ、前向きにものごとをすすめるべきである。



加藤清正

三二

有効な情報を素早く集め、効果的に活用する黒田孝高の力

堺を出帆して淡路島の洲本
明石から淡路島の福良で秀長
軍と合流

天正13年(1585)の豊臣軍による四国攻めの時、本来、総大将として出陣する予定だった秀吉が病気になったため、その代わりに弟の秀長が総大将となって3万の軍勢を率い、堺を出帆して淡路島の洲本に渡り、同じく3万の大軍を率いた秀次が副将として、明石から淡路島の福良で秀長軍と合流し、合わせて6万の大軍が阿波の土佐泊に上陸した。

こうした動きは長宗我部元親も察知しており、豊臣軍が阿波から攻めこんでくることを想定し、軍勢の主力を阿波に投入し、また、阿波の主要な城の強化を行っていた。

そうした長宗我部軍の防衛態勢の情報をキャッチした黒田孝高は敵の裏を衝く作戦を敢行している。孝高は、蜂須賀正勝・宇喜多秀家らとともに、2万3000の軍勢で、阿波ではなく、讃岐に向かい、屋島に上陸しているのである。情報収集をし、有効な情報を素早く集め、それを効果的に活用していたことがわかる。

このとき、小早川隆景・吉川元長が3万とも4万ともいわれる大軍で伊予に攻め入っており、これで長宗我部軍は完全に浮き足立つ形になってしまった。

孝高の軍勢は、讃岐の喜岡城・植田城を攻めたが、阿波で秀次軍が岩倉城攻めに手こずっているという情報が入った。このあたり、孝高は、ただ目の前の敵にあたるだけでなく、豊臣軍全体の戦況をつかむべく、情報収集活動を行っていたことを物語っている。

孝高は岩倉城近くに着陣するや否や、岩倉城および城を守っている長宗我部掃部頭に関する情報を集めている。その結果、城は要害堅固の地に築かれており、城将

蜂須賀正勝・宇喜多秀家

讃岐に向かい、屋島に

小早川隆景・吉川元長
伊予

讃岐の喜岡城・植田城

岩倉城

長宗我部掃部頭も元親の重臣として、彼を中心に、城兵が結束を強めて、力攻めでは容易に落とせそうもないことがわかった。集めた情報をもとに城攻めの方法を考え、結局、威嚇をくりかえし、最後にあつかいを入れて開城にもちこむという策をとることが決まったのである。

そこで孝高は、まず付近から材木を集めさせ、城中の櫓より高く組みあげ、城を見おろす場所を作らせ、鉄砲を撃ちかけ、しかも、1日に3度、関の声をあげさせたという。

これには、勇猛なことで知られる長宗我部軍の戦意は萎え、次第に厭戦気分が広がり、頃あいよとみた孝高があつかいを入れ、開城勧告をすると、あっさりそれに応じてきた。秀次が、敵の情報収集をせず、そのまま力攻めをしていれば、落とせたかどうかかわからず、落とせたとしても、自分に相当の犠牲者が出たことはまちがいない。情報を収集し、それを効果的に使った孝高だからこそ勝ちとった成果である。

この時の四国攻め、すなわち長宗我部元親との戦いにおいて、この岩倉城開城は決定的な意味をもった。岩倉城の開城の報を聞いた脇城の長宗我部新右衛門が、これ以上の抵抗は無理と判断し、城を捨てて土佐に逃げもどり、また、秀長に攻められていた一宮城の谷忠澄と吉田康俊の二人も、籠城を続けるのは困難とみて降服しているからである。

このあと、徹底抗戦を叫んでいた長宗我部元親も降服し、豊臣軍の四国攻めは終わっている。

脇城の長宗我部新右衛門

一宮城の谷忠澄と吉田康俊

教訓

- 相手が情報を得たということをいち早く知る事で、さらに優位にたつことができる。
- 自分のおかれている状況、目の前の相手方の状況を知るだけでなく、総合的に味方全体の状況も把握する必要がある。



黒田孝高